

前回お話ししたバンドンプロン遺跡の発掘の合間に訪れた寺院跡や、また隣国のアンコール・ワットに行ったときの写真も紹介する。

イサーンというのはタイの東北地方の通称。平均標高約 200 メートルの緩い起伏が続くコラート高原がほぼ全域に広がっており、ナコンラチャシマ県やウボンラーチャターニー県などの「南イサーン」と、メコン川を挟んでラオスと国境を接するウドンターニー県やナコーンパノム県などの別名「北イサーン」という 2 つのエリアからなる。古代の農耕文明や、その後のクメール王朝時代の遺跡が各地で発見されるなど奥深い歴史性と、ラオスやカンボジアからの影響を受けつつ育まれてきた独自の伝統文化が魅力的です。また人々のあたたかなホスピタリティもよく知られています。

バン・プラサート Ban Prasat

ナコンラチャシマ市内から北東へ約 45 キロメートルのところにあるバン・プラサートは、東南アジア最古の遺跡・バーンチェンに次いで約 3000 年前のものとされる墳墓などが発見された村。人骨、青銅や貝殻のアクセサリ、土器などが大量に出土。

私が訪れた 1988 年にはまだ本格的な博物館はできていませんでした。土器などの副葬品を伴う墓地遺跡がかつて発掘調査され、村人のなかには発掘調査で覚えた技術を駆使して「盗掘」を試み、若干の財産を成した人もいるそうである。村の入り口からすこし入ったところに位置する三叉路の角に、芸術局の使用する小さな建物がある。一見バスの待合室かと間違えるような建物である。

全体が 3 つの区画からなり、むかって左側に発掘された墓を復元して伸展葬の人骨とともに展示し、壁には土層の状況も色分けして示してある。右側の区画には植木鉢を置く台のような簡単な棚に出土した土器をならべてある。ここには特に説明もなく、ただ土器が陳列してあるだけである。真ん中の区画では、一冊だけしか存在しないというこの村の発掘調査に関する調査報告書をもとに、壁に貼って展示する解説を制作中であった。また村内の別の地点では石材が露出したところがあり、ピマイの芸術局第 6 地方事務所ではここを発掘して石造の建造物の様子を明らかにし、建物の復元整備などを行なって歴史公園化したいとする計画を持っているとのことであった。

タイの歴史公園

現在タイ各地に 10 箇所の歴史公園が設置されている。これらのうち、ムアン・シン歴史公園が 1987 年 4 月 3 日に最初の歴史公園としてオープンし、続いて 1988 年 5 月 21 日にパノム・ルン歴史公園がオープンした (The Fine Arts Department 1988)。スコータイヤアユタヤのようにかつて王都であった町を広く囲ったものもあれば、パノム・ルンやピマ

このようなクメール寺院跡、シー・サッチャナライ、カンペン・ペット、ムアン・シンなどの古代都市跡、プラ・ナコン・キリのような 19 世紀半ばに建てられた宮殿が中心となったものなど、歴史公園の対象となった史跡の時代や性格は様々である。

これらのうち、筆者が実際に訪れたピマイとパノム・ルンについて見てみよう。

ピマイ Prasat Hin Phimai

ピマイは、イサーンの入り口に位置する都市のナコンラチャシマの東北約 60km にあり、タ 11 世紀から 13 世紀にかけてのカンボジアのアンコール朝美術の影響を受けた時代の代表的な寺院建築のある町である。町全体が濠と城壁で囲まれた、幅 565 m、長さ 1,030 m の規模の一つの都市遺跡としてとらえられ、現在は南側にだけ残る城壁の中央に町の門も残っている。高さ 28m の中央祠堂を持つピマイ寺院 **Prasat Hin Phimai** がそびえ、ここをめぐる寺域が歴史公園に設定され、入場料 5 バーツ（外国人は 20 バーツ）を払って中に入ることになる。ピマイ寺院は、タイでの説明によると、カンボジアのアンコール・ワットに先立って 12 世紀の初頭に建設されたものでアンコール・ワットの原型となったもの、とされている。

公園内の寺域の一角に芸術局の第 6 地方事務所がある。公園の外の町の北西の隅には国立博物館があり、ピマイ寺院の建物に復元されなかったレリーフ、周辺の遺跡で出土した遺物や墓地遺跡出土の遺骸など、展示している。展示資料の関係からか、きちんとして建物のなかに展示されているのではなく、屋外展示場といったおもむきである。入館料は無料であった。

ピマイでは、11 月半ばの夜、この歴史公園を会場にして音楽とライトでショウアップされた舞踊劇、民族舞踊を演ずる祭が開かれる。この期間中、近くを流れるムン川では伝統的なボートレースも開催され、タイ各地から集まったボートが競争する。私はこの祭は見えていないが、おそらくライトアップされた巨大な祠堂の建物を前に繰り広げられる優美な民族舞踊は、幻想的な雰囲気を漂わせたものであっただろう。

中央祠堂内にはレプリカのジャヤヴァルマン 7 世の座像やナーガにのる仏像が安置されている。

ピマイ寺院の復元工事

ピマイ寺院の復元工事は、1964 年から 1969 年にかけて、フランス人の考古学者グロリエ **Bernard Phillipe Groslier** と、工事監督のリチャード **Pierre Richard** によって行なわれた。グロリエとリチャードは、復元に際してアナスティロース方式 **anastylosis method** を採用した。この方法は、崩れ落ちた建築部材をできるだけもとの位置に復元していき、土中に埋もれた石材も発掘し、発掘された部材も可能な限りもとあったと推定されるところにはめ込み、新しい部材の使用はできるだけ避ける。石材どうしを接着するのに石材双方の接着する部分にくぼみを作り、ここに鉄筋やセメントなどを渡して接着して、外観上

はまったくわからないようにする修復方法である。

1985 年「考古学上の保存のための規則 Regulation for Archaeological Conservation」 芸術局

このような経験を踏まえて、1985 年にはタイ政府の芸術局から、「考古学上の保存のための規則 Regulation for Archaeological Conservation」が出され、史跡保存のためのガイドラインが示された。第4章に19項目の具体的なガイドラインが挙げられている。いくつか主要なものを見てみると、まず遺跡の現状の調査の必要性和、図、写真などを含む調査の記録が残されなければならないこと(1条)、後世に改変された建物はオリジナルな状態に戻されること(3条)、遺跡についてはその遺跡の考古学的重要性がもっとも発揮される保存方法が取られること(4条)、必要な遺跡には強化措置が取られるが、付加された部分はオリジナルな部分と区別できるようにすること(5条～7条)、また新たに復元された部分についてもオリジナルな部分と明確に区別できるような色や材料を用いること(8条)、崩れ落ちた建て物の場合にはその断片を集めてさらに失われた部分を補って再構築できること(10条)、現在も使用されている建物に関する注意事項(12条・14条)、盗難などに対する予防措置(13条)、これらの保存措置についても詳しい記録が残されなければならない(18条)、などが示されている。このガイドラインによって、考古学上の遺跡は調査され、そして積極的な復元措置が取られ、時にはこのガイドラインを越えた改変もなされている

パノム・ルン歴史公園 Prasat Hin Phnom Rung

次にパノム・ルン歴史公園は、1988年5月に公開されたが、ここもピマイと同じくロブリー期のクメール寺院である。町中にあるピマイ寺院とは違って、海拔383mの火山の山頂にある。ブリラム市の南約50kmのここに到る交通手段は自動車によるほかない。カンボジアとの国境にも近い。山頂近くまではくねくねと曲がったそれなりに快適な道が続き、歴史公園の入り口付近に広い駐車場がある。たくさんの土産物の店や食べ物屋が軒を並べ、さながら門前市のようなものである。入場料をゲートで払って入り、庭園のような道を通って参道に出る。参道の階段が高いが、頂上に見え隠れする中央祠堂に期待感が高まる。途中のプラットホームから下を見下ろすと、イサーン(7)の平原が広がり、眺望が美しい。

10世紀初めに建てられ12世紀まで改築がされていたとされる。1971年から芸術局によって修復が始められ、参道の両脇の石柱、ナーガのつけられた橋、階段、山頂の回廊、そしてその中の中央祠堂などが大変美しく復元された。

ナーガは、一つの型からいくつもが復元されたようで、どれも同じ型の継ぎ目をみせていた。

Reclining Vishnu

ここには、休日には多くの人々が訪れる。中央祠堂の入口のリンテルの著名なレリーフ

が盗難にあったりしたこともあって、ここはタイの人々には特に有名な歴史公園なのであるという。

この写真は現在のものであるがかつては欠けたところはなかった。この完全であった「Reclining Vishnu」とか「the god Vishnu in slumber」と表現されるレリーフは、1960年代に寺域から失われていたことが知られている。

調査の結果、これがなくなったのが1961年から65年の間で、この間にここに舞い降りたヘリコプターがあったこともわかった。後にこのヴィシュヌのレリーフはアメリカ合衆国のシカゴ美術館 the Art Institute of Chicago に展示されていることがわかり、タイ政府は返還交渉を行ったが容易ではなく、25万ドルを支払うとか、代わりに何点かのタイの美術工芸品をシカゴ美術館に置く、などの条件でようやく1988年12月、タイに戻ったのである。

すでに歴史公園は一般公開されていた。こうした出来事があった、「ここを知らない人はほとんどいない」と表現されるほどタイの人々に有名なのである。

ムアンタム寺院

タイ東北部のイサーン地方に点在するクメール遺跡の一つ。ブリラム県にある。パノム・ルン遺跡の南東に位置している。9～10世紀にかけて造られたヒンドゥー寺院跡で、池に囲まれたレンガ造りの祠が4塔建っている。周辺は整備され、遺跡公園になっている。

修復中の尖塔

足場は竹で組まれていた。

チョンプラ遺跡 Prasat Chom Pra

チョンプラは、スリン県にあるクメール遺跡。ジャヤヴァルマン7世が統治した時代である12世紀後半から13世紀前半のバイヨン様式で建てられた施療院（現在の病院に相当する施設）の遺跡。

シコラプーム Prasat Sikhoraphum

12世紀頃のクメール寺院で入場料20バーツ。

中央祠堂の東正面のまぐさ石。中央は、10本の腕を持つ踊るシヴァ神。シヴァ神を中央に、ドゥルガー神、ヴィシュヌ神、ブラフマー神、ガネーシャ神。中央の踊るシヴァと、4面の顔を持つブラフマー神、象の頭を持つガネーシャ神がある。

アンコール・ワット

昨年おこなわれた「アンコール・ワットへの道」の特別展のあと、それに触発されて9月末からアンコール・ワットに行ってきたのでそのときの写真を紹介する。

クメール王スールヤヴァルマン 2 世（在位 1113～1150 年ごろ）が即位するとすぐに着工され、約 30 年の歳月をかけて建立した寺院である。この寺院は環濠の四周 5.4km、濠の幅 190m、西参道 540m、3 重の回廊、本殿の中央尖塔（高さ 65m）を中心に 5 基の堂塔からなりたっている。壮大な伽藍にもかかわらず、幾何学的な平面展開と堂塔の立体的な配置はクメール建築の調和と円熟を示している。5 基の堂塔が世界の中心であると考えられた須弥山（メール山）を模しているなど、この寺院建立には王権の神格化と結びついた思想的背景がある。回廊は数キロメートルにもおよび、ヒンドゥー神話などをテーマにした浮き彫りが壁面を飾っている。

朝焼けのアンコール・ワット?

あいにく晴天ではなかったので朝日に輝くアンコール・ワットとはならなかった。

アンコール・ワット第 1 回廊

一辺約 200m の長い回廊には、壁面いっぱい薄肉浮彫りが刻まれ、さながら絵巻物を歩きながら見る感がある。回廊の浮彫りは、創建者スールヤヴァルマン 2 世の行進、ヒンドゥー神話やインドの叙事詩をモチーフにした場面が、迫力ある絵図を構成する。

アンコール・ワット十字型中回廊

第 1 回廊と第 2 回廊をつないでいる中回廊には約 12m 四方の池が四つある。当時、ここには水がたたえられ、参詣者は沐浴して身体を清めた。この回廊の柱には 14 ヶ所にわたり日本人による墨書跡があり、なかでも森本右近太夫の遺筆（寛永 9 年、1632 年）が有名である。

落書きの文面

寛永九年正月初めてここに来る 生国は日本。肥州の住人藤原朝臣森本右近太夫一房
御堂を志し数千里の海上を渡り 一念を念じ世々娑婆浮世の思いを清めるために ここ
に仏四体を奉るものなり（後略）

アンコール・ワット本殿の尖塔と大階段

アンコール・ワットの中核部分である。第 2 回廊と本殿の間に内庭が見えるが、往時は水をはった小池であったといわれ、大階段への通路が陸橋式になっている。急傾斜の大階段を登ると第 3 回廊、さらに本殿へつながる。

お坊さんの団体見学が印象的だった。

アンコール・ワットの修復は上智大学の石沢良昭先生が長年尽力してきた。上智大学は現地に「アジア人材養成研修センター」を設置して、「カンボジア人の手によるアンコール・ワットの修復」をかかげて保存担当者の養成にあたってきた。